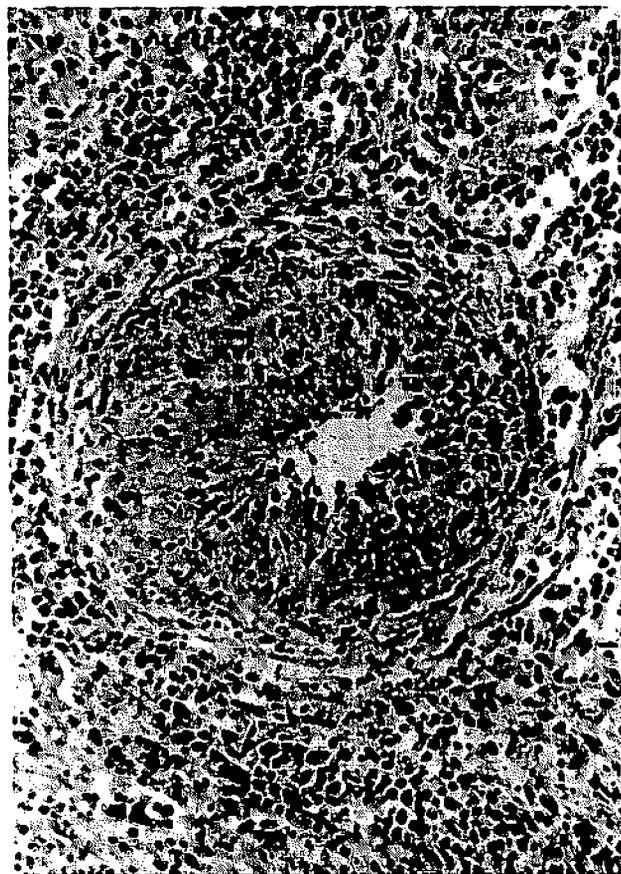


犬の皮下の腫瘤

家畜衛生試験場九州支場出題 第27回獣医病理学研修会標本No.469



動物：イヌ（ドーベルマン）、雄、7ヵ月。

臨床および肉眼所見：61年10月初旬：頸部の腫脹，硬結に気づく。17日：自潰し，漿液が多量に流出。アンピシリン，デキサメサゾン筋注。上記治療により，腫脹は軽減し，漿液の流出は止まったが，腫瘤は日々に増大した。その後治療を中止すると，腫脹し，漿液が流出した。11月19日：腫瘤摘出手術。腫瘤はソフトボール大であり，著しく硬く，結合織に囲まれており，中心部に黄色の領域を認めた。手術後の経過は悪く，腫脹，漿液の流出がみられた。12月18日：患畜は元気・食欲なく，下痢がみられたので予後不良と判定し安楽死した。腫瘤の大きさは鶏卵大であった。畜主の希望で剖検はできなかった。病理組織学的所見：腫瘤は小さな肉芽腫で構成されていた（写真1，H E染色， $\times 125$ ）。肉芽腫の中央は若干の好中球が集簇していたり，空隙となっていたが，明らかな菌塊や異物はみられなかった。肉芽腫を形成しているマクロファージないし類上皮細胞はまれに癒合し巨細胞

を形成していたが，多くのものは細胞質の豊富な孤立した細胞からなっていた。周囲には多数のプラズマ細胞が浸潤し，軽度の線維芽細胞の増殖がみられた。

電顕的には，類上皮と思われた細胞は，細胞質が豊富で，粗面小胞体やミトコンドリア等の小器官に富んでいた（写真2， $\times 6,000$ ）。核は大きく不整形で大きな切れ込みが時にみられた。隣接する細胞との境界は明瞭であり，時にinterdigitationsがみられたが，デスモソームのような連結装置はみられず，また，ライソゾームや食空胞はみられなかった。

PAS染色，グラム染色，Grocott染色を施したが，原因を示唆するような菌や真菌等はみられなかった。

材料が生検材料で小さかったために，皮膚との関係が不明瞭であったが，検索した限りでは肉芽腫は真皮までで，表皮と連絡はしていなかった。また，皮下のリンパ節には同様な病変が浸潤性に波及したものと考えられた。病理学的診断：肉芽腫性のリンパ節・皮膚炎。